この父ありて

梯 久美子

作家 萩原 葉子 ③

詩人はまるで子供のように

世田谷区代田に建てた家で、朔太郎、母ケイ、妹アイ、娘の葉子と明子という5人での暮らしが始まった。

家長は朔太郎だが、実権を握っていたのは母のケイだった。ケイは葉子に「一家が暮らしていけるのはみんなお祖父さんのおかげなんだよ、お父さんの原稿なんかじゃ生活できないんだからね」と言って聞かせた。

◎ ◎

朔太郎は毎晩のように飲みに出かけたが、そのとき「おっかさん少し小づかいくれ」と遠慮しながら言うのが常だった。母の小言を聞くのが嫌さに、出してあった赤い鼻緒の下駄をつっかけてそのまま出て行ってしまったこともある。

夜、酔って帰る途中の朔太郎に偶然出くわした葉子は、『父・萩原朔太郎』の中で、その姿をこう描写している。

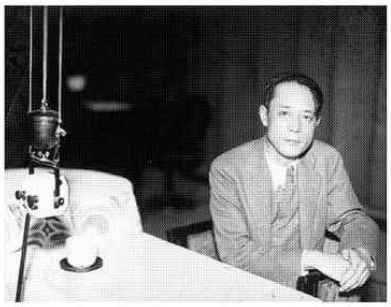
〈すっかり型のくずれた二重廻しに、女物のペシャンコの下駄を履いている痩せこけた足元には、ゆたんぽの火傷に巻いた繃帯がよごれてまきついて、歩くたびに踏まれていた〉

同書には、家庭内での朔太郎のエピソードが数多く書きとめられている。

ケイや使用人から世話を焼かれて育った朔太郎は、50歳を過ぎても食事のときに御飯粒やおかずをぼろぼろこぼした。そんな息子のために、ケイはあるとき大きな前掛けを縫う。それを差し出された朔太郎は、おびえるように上半身をうしろにそらしたが、結局言われる通りに首から吊るした。そのうちに食事の前に自分で引き出しから出して掛けるようになった。

歩くときはいつも、あやつり人形のようにふわふわした足取りだった。ケイはつまづいて転ばないか心配し、朔太郎の帰り道にころがっている大きな石ころをどけに行った。葉子自身も、道の真ん中に石があるのを見ると、どけることがあったという。

しばしばラジオで話をしたが、そんなときケイは、外出着からハンカチまで念入りに準備し、朔太郎があまり早く家を出ないよう気を配った。放送局に行く途中で酒を飲んでしまうことを怖れてのことだった。



日本放送協会（NHK）大阪中央放送局を訪れた朔太郎（1938年3月）
＝水と緑と詩のまち前橋文学館提供

ケイから面倒を見てもらうことが必要だったのは、同居を始めたときまだ小学生だった葉子と明子の姉妹のほうだった。だが、葉子のエッセイや自伝的小説の中で、ケイは冷酷な祖母として描かれている。自分の娘であるアイとはひんぱんに芝居見物に出かけ、着物をあつらえるが、姉妹には洋服一枚買ってくれることがなかったという。

葉子の『朔太郎とおだまきの花』には、初潮を迎えたときの話が出てくる。葉子は、出奔した母のことをいまだに淫乱との

〈眼という身体の器官では、確かに私を見たのであっても、心の眼では見なかったのであろう。父は、そのまま原稿へ向ってしまった〉

葉子は結局、何も言い出すことができなかった。3日間学校を休み、ケイに「おなかが痛い」と言い続けたが察してもらえず「盲腸かも知れないから寝ていなさい」と言われる。

仕方なく寝ていたとき、以前クラスの女生徒が見せてくれた、油紙のついた布切れのことを思い出す。自己流で月経帯を縫い、脱脂綿を用意した葉子は、「盲腸治った」とケイに告げて学校へ行くのである。

◎ ◎

朔太郎が再婚したのは、代田の家で暮らし始めて5年後の1938（昭和13）年4月のことだ。朔太郎は52歳、相手の大谷美津子は26歳だった。この年、女学校を卒業していた葉子は、8歳しか年の違わない若い継母を迎えることになった。

美津子との出会いは前年のことだった。朔太郎は古くからの友人である詩人・大谷忠一郎の紹介で、彼の家で見合いをした。相手は朔太郎に見合った年齢の女性だったが、それよりも大谷の妹の美津子を気に入ってしまったのだ。

〈五十二歳の今日になって、また情火の炎々たるものに悩まされてる〉〈この恋がもし失敗したら、僕の余生はおそらく精神上の廃人となるでせう〉

当時、朔太郎が詩人の丸山薫に送った手紙の一節である。熱心に求婚し、1年かけて結婚にこぎつけた。

結婚式は北原白秋を媒酌人に、目黒の雅叙園で行われた。式の後は、熱海、伊豆、伊香保温泉、前橋などに3か月あまりの新婚旅行に出かけている。だが、この結婚は1年ほどしか続かなかった。

（ノンフィクション作家）

掲載日 2021年11月27日 日本経済新聞 朝刊 29ページ ©日本経済新聞社 無断複製転載を禁じます。